

かごしまの 昔話

「長命比べ」



昔々、指宿地方のある山の中で、三匹の猿が一緒に遊んでいました。大木の枝から枝へ飛び移ったり、幹を登ったり降りたりしておりました。そこへ、栗がひとつ転がってきました。たまたま、いかが割れて飛び出したような、とても大きなものでした。三匹は同時に手を出してつかもうとしましたが、お互いの手がぶつかっただけで、栗はそのまま転がってしまいました。欲しいのはみんな同じ。猿たちは、「一緒に見つけたから、三つに分くればよか」「これを三つにするのは難しかど」「じゃつどね、それに、分けたにしても、食うところはちつとじゃ。そいじゃつたらん」と言い、ひとつの栗をどうするか話し合いました。その結果、みんなの中で一

番長生きをしているものがこの栗を食うことに決まったのです。一番の長生きは、一番古い昔のことを知っているだろうというので早速、どれぐらい昔のことを知っているか、語り比べを始めました。

「おれは、近江の海（琵琶湖）がまだ梅干しぐらいだった頃を知っておる。それですいぶん長生きなんだぞ」

「おれは開聞岳に腰かけて、その下の池田湖で顔を洗っておった。開聞岳は昔そげん低かったのじゃ。それを知っておるから、おれも長生きなんだぞ」

二匹がこう言うのと、残った猿はウォンウォンと泣き出し、「お前たちの話を聞いておれば、おれはもう悲しうて、涙が出てとまらんがよ」といい、次の



ように語りました。

「お前たちは、近江の海がまだ梅干しぐらいだったとか、開聞岳に腰かけて、池田湖で顔を洗ったとか言うたが、そのとき、おれの八十八になる孫が死んだのじゃ。それを思い出して悲しうてならんのじゃよ」

そこで、この猿が一番長生きだということになり、栗をひとりで食べるこゝとができたそうです。

（原話 南九州市川辺町橋口元二『手無し娘』）
文／有馬英子 絵／二石綱夫